

■財界待望の日中長期貿易取り決めも過日調印され、日中経済交流は新時代を迎えました。一方、将来の日本外交の展開に重要な意味をもつ日中平和友好条約をめぐる動きも加速度を増しつつあります。近く発刊される中嶋嶺雄著『日本外交の選択』（東経選書・一二〇〇円）は、条約締結に際して最大の考慮を

払う必要がある「覇権」問題の由来を中心に過去一〇年間にわたる歴史的事実の解明より成った問題提起の最新論集です。
 ■近年手づくりによる生活用品の価値が見直されてきています。後継者難をはじめ、大きな危機に直面しています。遠藤元男著『職人と仕事の歴史』（B6



判・一三〇〇円）は、古代から現代に至るまで、職人の技術や生活、職人気質などについて、多角的・系統的に検討しなおし手仕事の良さを今後どう生かしていくたらよいか、職人の生きべき道は何かを探ります。
 ■日本のGNPはいくらか、就業構造はどう変わったか、経済計画はどんなものがどう影響を

与えたか、国際収支の天井はいつどうして黒字基調に転じたか——日本経済を理解するには、歴史、制度、事実、経済理論についてバランスのとれた知識が必要でです。こういう要望に応えて、『日本経済読本 新版』（A5判・一五〇〇円）が増ページ、内容を一新して、近日発売になります。ご購入ください。

一粒の麦もし死なずば

『回想の文学』（全五巻）

中嶋 健蔵 著

作戦”をみて、その発想とい、実践力とい、うらやましくさえ思ふ企業人は決して少なくないはずである。

また常務会廃止、会議全廃、年功序列撤廃、タイム・カード廃止、スタッフ制廃止等々も「最軽量体質」を目ざす勇断と呼ぶにふさわしかろう。「企業は小集団方式を基礎にすべき」で、大規模になっても、「ムダのない中小企業の経営方式を貫くべき」だとする著者の信念は、今日、多くの苦惱するビッグ・ビジネスにとって頂門の一針と言うべきであろうか。まことに、時代は、それにふさわしい人物を送り出すものである。国民経済研究協会理事長

豊岐 晃才
 （東洋経済新報社 八八〇円）

角力で、なまくら四ツというのがある。右四ツでも左四ツでも取れる器用な力士のことであるが、語感が示すように決してほめ文句ではないのである。やはり定まった型を持ったほうが大成する。器用貧乏というのに近いのかもしれない。

若いころの中嶋健蔵には、ややそれに近い印象があったのは否めない。名門、東大仏文の辰野門下であるが、渡辺一夫、山田珠樹といったアカデミシアンではない。かといって、小林秀

雄、今日出海、大岡昇平といった文学一筋の野人でもない。そして、健チという愛称で、誰からでも愛される。

頼まれればイヤといえない性分なので、新しい会の事務方、出版の企画、世話人、すべて持ち込まれ、それをけっこうこなしてゆく。こうなると、むずかしいことは彼に頼めばという悪循環が生じ、年のわりに世話役的な風貌さえ身についてくる。これは大学卒業後、月給五〇円也の講師を拝命した時に、辰野

教授に「大学外で暴れる」ことの了承をとりつけた因縁かもしれない。

表面、中嶋健蔵は微笑を浮かべながら事務局、世話役を業々と演じていたが、その内面はどうであったらうか。深夜、一人になった時、ふっと「オレはこのままでよいのか」という悔恨ともあせりともつかぬ屈折した感情がこみあげてくることはなかつただらうか。人間である。全くなかつたといえぼツンであろう。その五〇年余にわたるウツ屈した感情を、ほとぼしるようにブチまけたのが本書五巻である。

らしく、戦災でそのメモが焼けたことがわかった時、見舞いにきた豊島与志雄が「それは焼けたほうがよかつたね」と言つたほどのものである。

この時あるを予想してではあるまいが、若いころからおそろしく几帳面にメモをつけていた。それは昔から有名であった

高師付属中学時代、むしろ科学志向であつた著者が、友人の兄菊池審一郎の影響から、文学——芸術といつたほうがよいかもしれぬ——の魅惑にひかれ松本高校に入学してから終戦までの前半生が、まるで昨日のことのように生き生きと描き出されている。驚くべき広範な交友、そして昭和文化を作りあげた惑星の大群。これは一つの魂の形成史であると同時に、貴重な社会世相史でもある。一粒の麦もし死なずば、だ。昨年度野間文学賞を受けた秀作。 (倫)